希望の光　- 解決への道

宇　野　繁　博

私は1964年2月に福井県で生まれ、25歳の時、難病（網膜色素変性症）により、視覚障害者の身になりました。当時小学校の教員をしていた私は、退職を前提とした休職となり、3年後、余儀なく退職となりました。

高校時代にすばらしい英語の先生と出会い、私も先生のような教員になりたいと夢を持ち、地元の小学校に就職しました。そして、将来は、中学校で英語を教え、大好きな野球の指導もしたいといろいろと夢がありましたが、わずか6年でその職を辞することになったのです。私は、幼い子供たちの純粋さがとても好きでした。そのような子供たちと別れなければならなくなり、また当時、結婚を考えていた女性とも別れることになりました。彼女も小学校の教員で、一緒に教材研究をしたり、スポーツを楽しんだりと親しくなり、お互いに結婚を意識するようになりました。しかし、私が視覚障害者の身になり、将来の見通しが全く立たない中でその関係はもろくも崩れていったのです。約3年間の交際でしたが、彼女を失った喪失感も言葉では言い表すことができないほど辛いものでした。

消えてしまいたい

仕事ができなくなり、車の運転は勿論のこと、新聞さえも読めない状況の中、親戚のある人から、障害者がいると、息子の縁談にも影響するかもしれないという内容の話を聞かされた時、私は人生に絶望し、生きていく気力が完全になくなりました。自殺をする勇気はありませんでしたが、できることならば、ナメクジのように自分自身に塩をかけて消えてしまいたいと思いました。人前で涙を流すことはありませんでしたが、夜になり布団にはいると自然と涙がこぼれました。これほどの涙がどこにあるのだろうかと思うほど、毎晩、涙がとめどもなく流れました。

これは夢であってほしい。どうか夢でありますようにと何度も願いました。なぜ、わたしの目は見えなくなってしまったのか。どうして、私はこんな運命に悩まされなければいけないのか。神はいらっしゃるのか。当時、イエス・キリストのことを知らなかった私は、そのような答えの出ない自問自答を繰り返していたのです。家の仏壇に手を合わせ、神棚に向かって祈り、また、祖父が神主をしていましたので、村の神社にも、何度もお参りに行きました。

そのような私の姿を見て、母も共に涙を流してくれました。自分のために涙を流してくれる人がいると思うだけで、慰めとなり、孤独感から解放されたように感じました。しかし、将来のことを考えると、私の心は不安でいっぱいでした。両親は私のためにできるだけのことは何でもしてくれました。ある時、母が次のように言いました。「繁博、もしお前が、目が見えないためにどうしても生きていくのがつらい。どうしても生きていけないと思うなら、かあちゃんと一緒に死のうね。」私はこの言葉を聞いた時、体が震えました。母はまだ48歳でした。目が見えなくなり、何もできなくなってしまった私のような者に対して、母は自分の命を捨ててもかまわないと言ってくれたのです。母は私の気持ちをよく理解してくれました。私以上に母の方がつらかったかもしれません。私にとって母の言葉は、大きな励ましとなり、母の気持ちに応えるため、母のため、そして、自分自身のためにも精一杯生きていこうと決心しました。

25歳の時、はり灸マッサージの資格を取得するために、盲学校へ入学。その後盲学校の教員資格を取得したのです。一方、母は、私のために1円でも多くのお金を残してやりたいと、無理をして働くようになりました。母はいつも「親として、お前にしてやれることは、お金を残してやることしかできないんだよ。繁博のことを考えると、夜も眠れない。だからこうして働いて、体をくたくたにしないと眠ることができないんだよ。」と言いました。そのような大きな身体的、精神的ストレスを抱えて生活する内、癌が発生し、母は55歳で亡くなりました。私が32歳の時です。私の将来をとても心配しながらの母の死でした。

自己中心こそ罪

私は30歳の時、再就職の道が開け盲学校の教員になりましたが、35歳の時、家族の人間関係の問題で悩み教会へ行くようになりました。牧師先生が私の悩みを聞いてくださり、人間の罪についてわかりやすく教えてくださいました、「人間関係で悩んでいる宇野さんは、自分を中心に物事を考えています。それがキリスト教で言う罪というものです。極端な言い方をすれば犯罪なども自己中心の結果です。これからは、自分を中心に生きるのではなく、神様を中心として生きることが宇野さんの人生に大きな祝福をもたらします。聖書を読んでみてください。今の宇野さんの問題にも必ず解決の道が与えられますよ。」

視力を失ったあと、すぐに教会へ連れて行ってもらった時は、神を信じることはできませんでしたが、この時は先生の言葉がストレートに入って来て、イエス様を信じたいという気持ちになり、聖書を読むようになりました。また、キリスト教のテレビ番組「ライフライン」を通して紹介された、インマヌエル彦根キリスト教会に集うようになり、2005年12月15日に洗礼を受けました。

神の御業を楽しみに

北陸のある盲学校のクリスチャンのH先生と、電話で話した時のことです。「宇野君は、ヨハネの福音書9章を読んだことがありますか。」「いいえ、ありません。どのようなことが書いてあるか簡単に教えてください。」「あのね、イエス様が道の途中で盲人をご覧になられたのです。すると、弟子たちが尋ねました。どうして、この人は生まれつき目が見えないのですか。本人が罪を犯したからですか。それとも、両親が罪を犯したからですか。この弟子の質問に対して、イエス様は次のようにお答えになられました。「この人が罪を犯したからでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」（ヨハネ9:3）宇野君のこれからの人生にも神様の御業が現れるからね。希望をもってイエス様を信じて、楽しみにしているといいよ。」

私はこの聖書の言葉を聞いた時、それまで長い間疑問に思ってきた謎が解け、心の中に光輝く希望が飛び込んできました。将来に対する不安がなくなり喜びが沸き上がってきたのです。もし母が存命中にこの聖書の言葉を伝えてあげることができたなら、母をどんなに励まし慰めることができただろうかと思いました。

また神様は、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。」（イザヤ43:4）と述べておられます。神様は無条件で私の存在を認め、私のように目が見えなくても、私を高価で尊い存在であると証言してくださっています。

4年前にあるクリスチャン女性と結婚しました。毎週日曜日、夫婦そろって教会の礼拝に出席できることは私にとって大きな喜びであり、神様からの恵みです。家庭の中心は常にイエス様で、それゆえ、私の家庭は平和です。「一切れの乾いたパンがあって、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家にまさる。」（箴言17:1）

・・・